北畠氏館跡

2006

津市教育委員会

あいさつ

津市の南西部に位置する美杉町は、林野率が八十七パーセントに達し、豊かな自然に恵まれています。

今から約七〇〇～五〇〇年ほど前、美杉町の多気（たげ）は、伊勢国司であり戦国大名であった北畠氏の本拠地でした。当時の多気は、伊勢国の中心としてたいへん栄えていたと思われます。

その多気の中心にあったのが、北畠神社の地―北畠氏館跡―です。ほかにも霧山城跡や北畠氏館跡庭園、多くの寺院などもあり、これらはすべて北畠氏の栄華を物語るたいせつな歴史的遺産といえます。

旧美杉村教育委員会では、平成八年度より北畠氏館跡の発掘調査を続けてきました。その結果、予想をはるかに超える大規模な遺構、大量の遺物、そして北畠氏一族に関わる新事実が発見されています。

そこで今回は、現段階までにわかってきた北畠氏館跡の実態をみなさまと一緒に探ってみたいと思います。

発掘調査にあたって、たいへんお世話になりました三重県教育委員会や三重県埋蔵文化財センター、そして多くの地元のみなさまに心からお礼申し上げます。

平成十八年一月

津市教育委員会　教育長　田　中　彌

例言

一．本書は、北畠氏館跡の発掘調査成果をまとめたカラーパンフレットである。

二．本書の作成は石淵誠人・小林俊之・古田和美（津市教育委員会）のほか、伊藤裕偉・竹田憲治（三重県埋蔵文化財センター）が行った。庭園の写真は瀧川和也（三重県県史編纂室）が撮影した。全体の編集は小林が行った。

目次

ようこそ北畠氏館跡・多気へ　……一
北畠氏館跡の構造　……四
館跡内部の変遷　……四
「ハレ」と「ケ」の空間―庭園と建物―　……七
北畠氏館跡庭園　……九
権威の象徴―入口と石垣―　……十
館の諸施設　……十二
かわらけ　……十三
調度品と備品　……十四
憧れと威信―貿易陶磁―　……十六
各地から運ばれてきたもの―様々な陶磁器―　……十八
祈りの風景―まつり―　……十九
北畠氏館跡と中世都市・多気　……二〇

ようこそ北畠氏館跡・多気へ

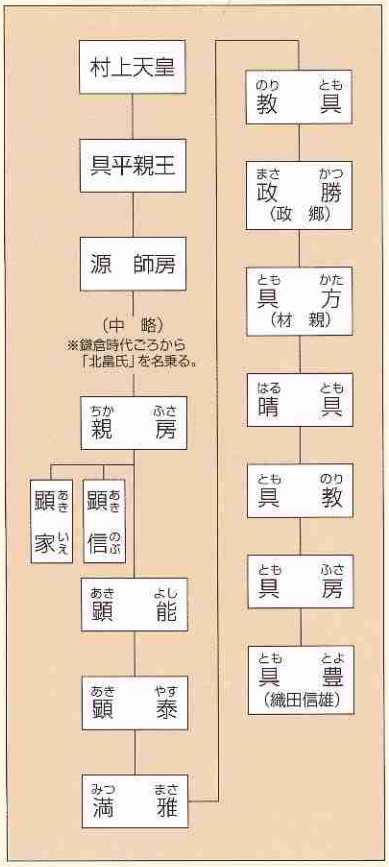
多気全景（南から）

鎌倉幕府が滅び、建武新政期から南北朝内乱期がはじまる頃、北畠氏は「国司★」として伊勢の地に赴きます。その後、室町・戦国時代を経るなかで、伊勢支配の正当性を示すためか、北畠氏は「伊勢国司」を名乗り続けます。そして、彼らがその本拠としたのがこの多気（たげ）です。

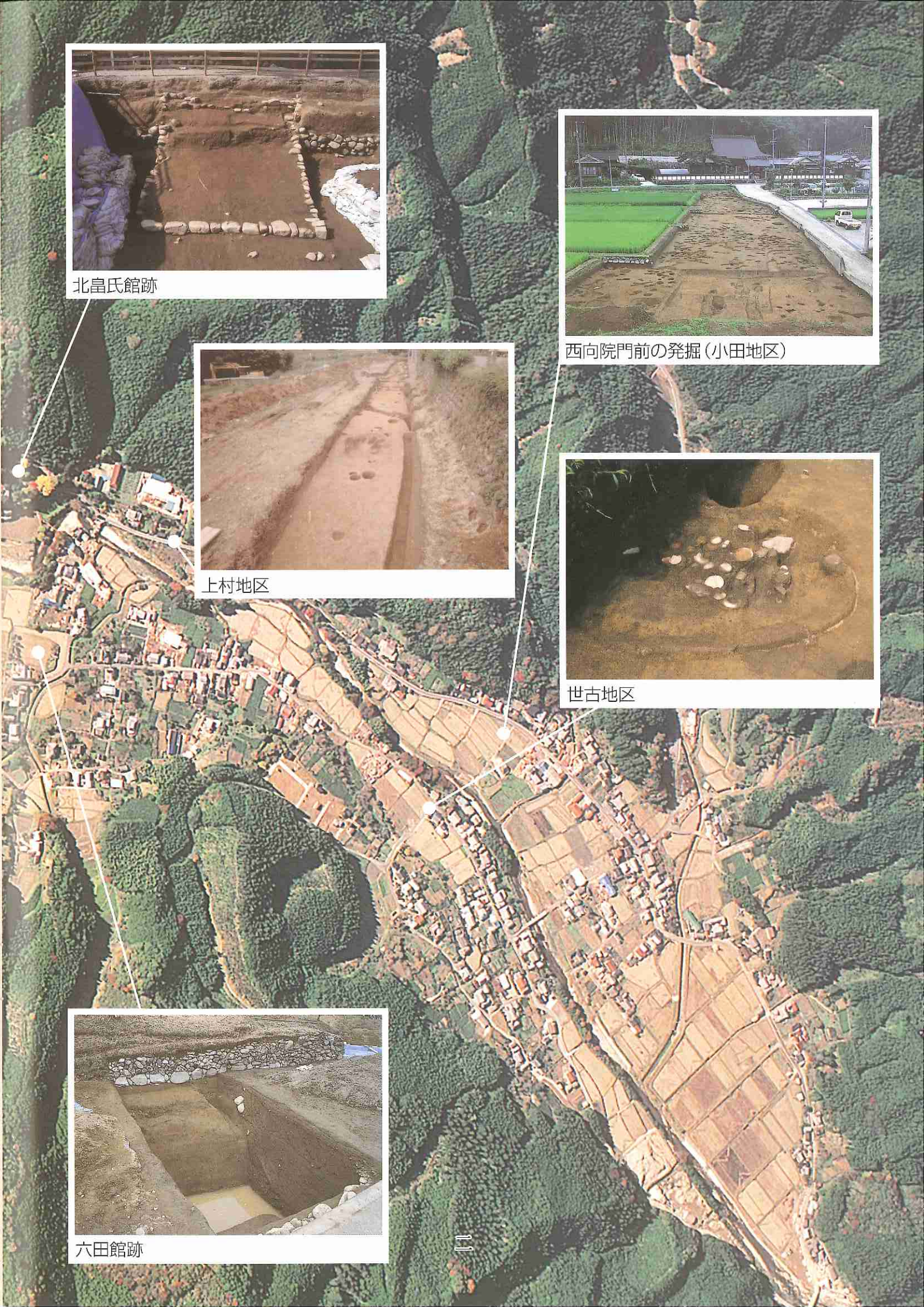
多気が北畠氏の本拠となった正確な時期は明らかではありませんが、一四〇〇年代後半頃かと考えられます。そして多気は、一五〇〇年代中頃から本格的に整備されて、北畠氏の拠点としての風格を備えていきます。伊勢国の一大政治拠点として、多気は一気に歴史の表舞台に登場したわけです。

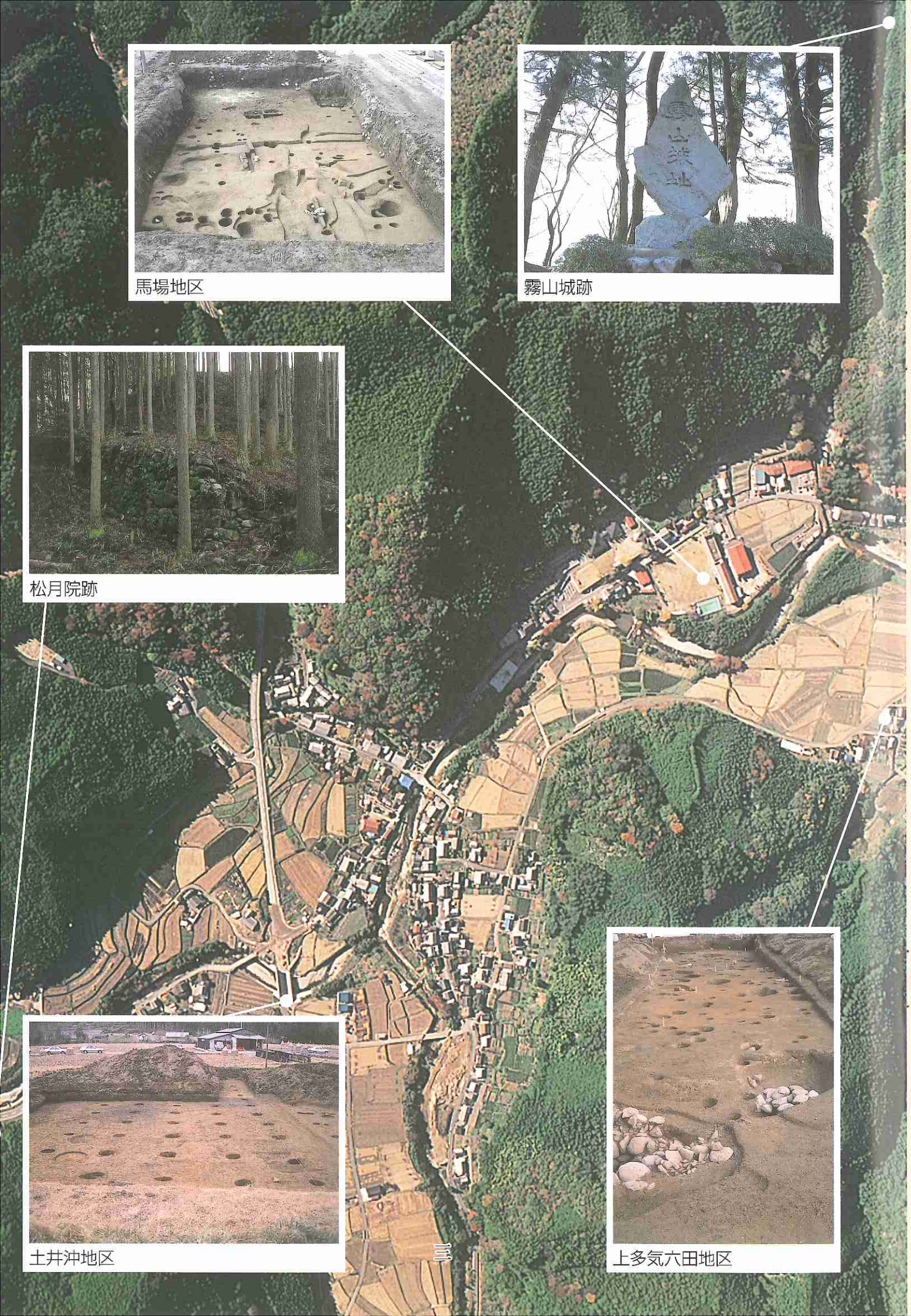
北畠氏は位階の高い公家であり、一方では伊勢国屈指の武家でありました。北畠氏は、多気の館でどんな生活を送っていたのでしょうか？発掘調査でわかったことから、彼らの実態に迫ってみましょう。

北畠氏系図



★奈良時代以降、各国に置かれた長官


北畠氏館跡
西向院門前の発掘（小田地区）
上村地区
世古地区
六田館跡



馬場地区

霧山城跡

松月院跡

土井沖地区

上多気六田地区

北畠氏館跡の構造

北畠氏館跡は、多気のほぼ中央にあります。昭和五七・平成四年度に開発に伴う発掘調査が行われた後、平成八年度より継続して学術発掘調査を行っています。

●館跡の範囲　北畠神社境内を中心に南北約二〇〇m東西約一一〇mの範囲で、面積は約二〇，〇〇〇㎡あり、西を山裾、それ以外三方を川（禁中谷川、大宮戸川、八手俣川）で囲まれた場所です。背後の尾根上には詰城跡、さらに奥の山上には霧山城跡があります。

●三段構造　時期によって多少の変動はありますが、上段（山裾から石垣まで）、中段（県道・民家まで）、下段（川沿いの耕作地部分）と捉えられます。その中では上段が中心的な部分なのでしょう。

●時期区分　大きく前期・後期の二時期にわけられます。前期はおよそ一四〇〇年代、後期は一五〇〇年代となります。前後期とも整地（埋め立て）が行われており、特に後期には上段が拡張される大造成が行われています。この後期大造成によって現在の神社境内の地形が決められたようです。

館跡内部の変遷

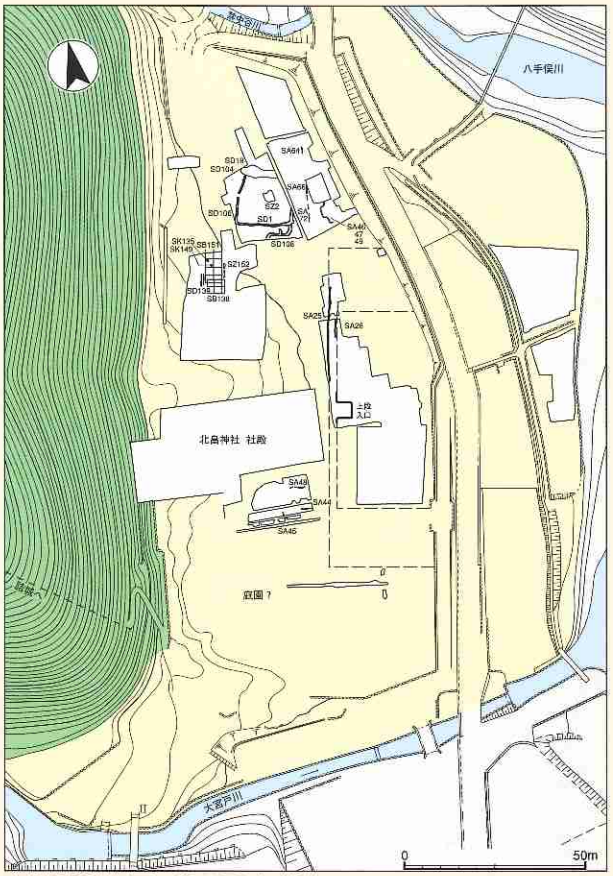
館跡は、前期の石垣を埋めて上段部分を拡張する大造成（後期整地）を境に、前期と後期に分けることができます。大造成の時期は出土遺物から一五〇〇年代の初めごろと考えられています。

●前期の館跡　この地に館が造られてから一五〇〇年ごろまでが前期です。現在見つかっている最も古い遺構は一四〇〇年代の前半のものなので、前期はおおよそ満雅（みつまさ）・教具（のりとも）から具方（ともかた）のころまでと考えています。それより前の顕能（あきよし）・顕泰（あきやす）のころの遺構はまだ見つかっていませんが、これからの調査で見つかる可能性もあります。

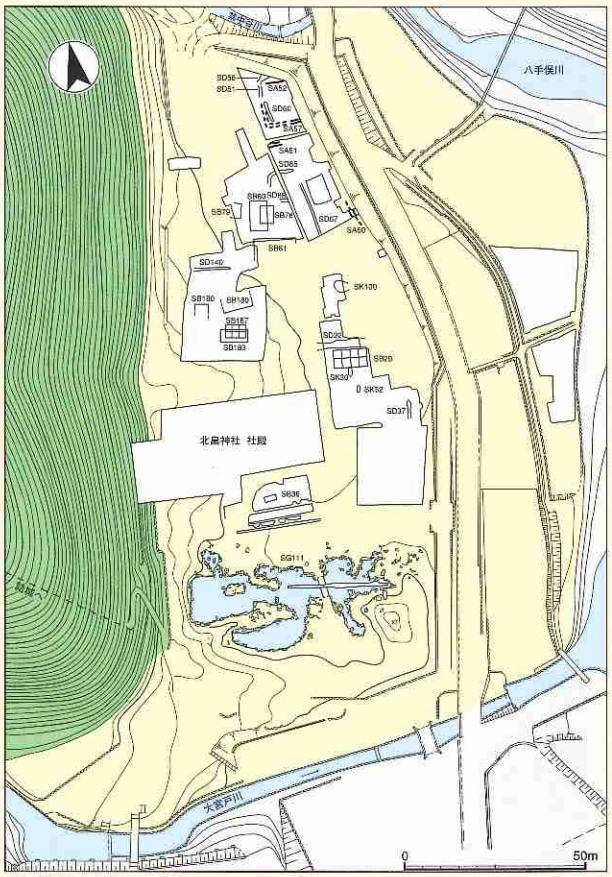
この時期の建物は、礎石建物が一棟、掘立柱建物が一棟確認されています。礎石建物は一四〇〇年代中ごろのもので、石敷きや雨落ち溝を備えている立派な建物です。掘立柱建物はそれよりもやや古いものです。

前期の建物や主要な石垣は、方向を揃えて造られています。同じ方向の地割は、館跡の対岸にもあり、多気の主要部分の計画はこのころに立てられた可能性があります。

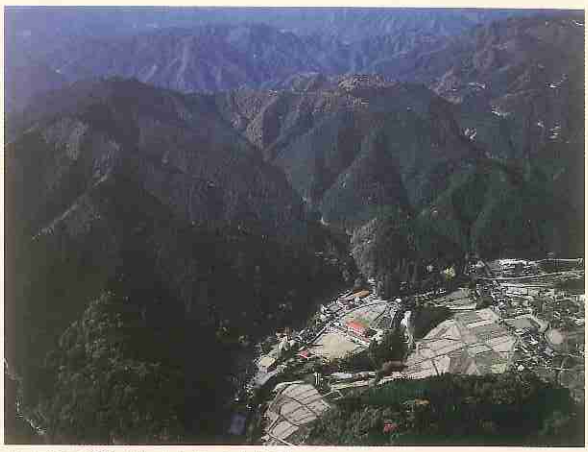
●後期の館跡　館跡では一五〇〇年ごろ、大造成が行われ、上段の部分が拡張されます。この大造成から北畠氏の滅亡までが後期です。具方から具房のころまでと考えています。



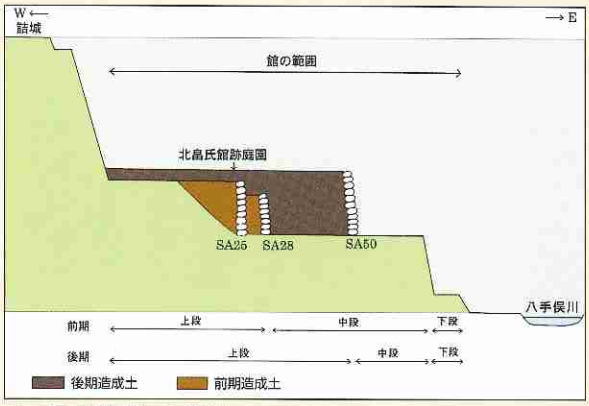
前期遺構図（1400年代）



後期遺構図（1500年代）



北畠氏館跡と霧山城跡



北畠氏館跡の構造

■後期造成土の様子

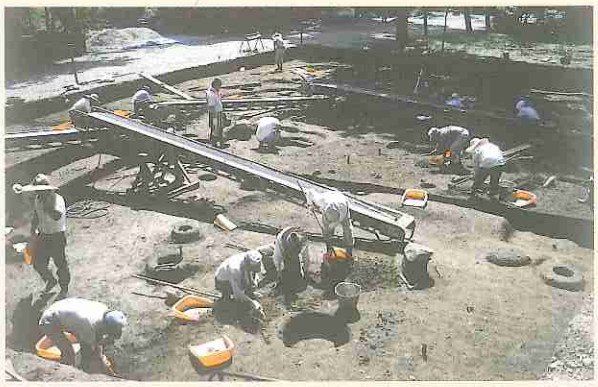
北畠氏館跡では、上段を拡張する大規模造成が行われている。上の写真はその造成土の土層断面だが、左上から右下へ斜めのラインを見ることができる。これは上段である左側から右側へ土を押し流すという行為によってできたものである。この造成が非常に短期間に行われたことを示していると言えよう。

このように発掘調査では、土層断面の観察によって様々なことがわかってくる。

この時期の建物は礎石建物が三棟、掘立柱建物が七棟確認されています。これ以外にも、建物のものと思われる礎石も見つかっており、多くの建物が建ち並んでいた様子が想像できます。館跡南部の庭園はこのころに現在のような形になります。

●大造成の意味　奈良の興福寺大乗院の僧侶であった尋尊の日記（『大乗院寺社雑事記』）には、北畠氏の館が一四九九年十一月に全焼し、一五〇〇年四月に再建されたという記事が載せられています。後期の大造成が行われたのは、この時である可能性があります。大造成は、上段を東に約二五m拡張するもので、その土量は約六六〇〇立方m（一〇トンダンプ約一一〇〇台分）にもなります。このような大工事を数ヶ月で完成させた北畠氏の財力は絶大なものであったと思われます。

このような大造成や庭園の造営が行われるのは一五〇〇年代前半のことです。北畠氏はこのころ木造氏などの一族との内紛に勝利し、南伊勢各地への支配を広げて戦国大名へと飛躍すると考えられています。上段の拡張と庭園の造営は戦国大名としての北畠氏を象徴する一大事業といえるでしょう。


発掘調査の様子

現地説明会

上空から見た北畠氏館跡

「ハレ」と「ケ」の空間―庭園と建物―

●**「ハレ」と「ケ」**　「ハレ」とは、儀礼の場で、接客の場である公的な性格を有した場。「ケ」とは、家人が日常生活にあてる場、のことです。現代の家においてもそのような意識がまだ残っています。北畠氏の時代においても例外ではありません。発掘調査の結果、北畠氏館跡においても空間構成が見えてきました。

●**庭園と空間構成**　まず北畠氏館跡庭園は、接客の場―「ハレ」―と考えられます。庭園の北には鑑賞のための建物が築かれていた可能性があります。

近年の研究により戦国時代には各地の大名たちが競って庭園を造ったことがわかってきました。彼らは当時の最先端文化を取り入れることにより、大名としての権威・風格をアピールするために造ったと言われます。北畠氏館跡庭園もこのような目的で造られたものと思われます。戦国時代の大名には、戦うことばかりでなく、政治的能力、文化的教養が必要だったのです。そしてこの庭園は、北畠氏の精神性も表していると言えるでしょう。

庭園の北側の発掘調査では、四つの大きな柱穴が見つかりました。これは門跡の可能性があり、庭園へ出入りする姿が想像できます。

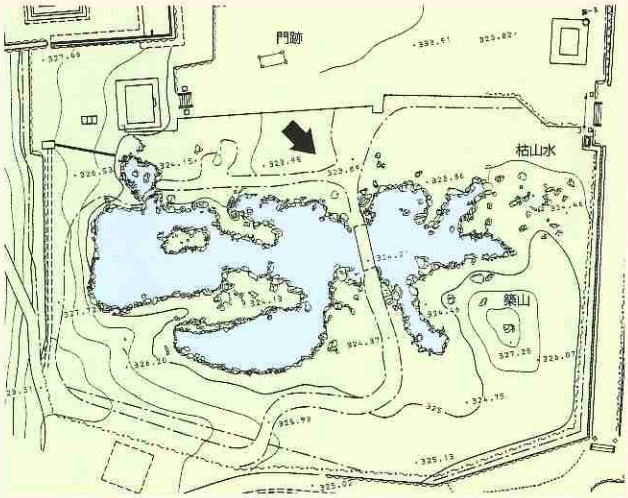
館跡の北部では比較的小規模な掘立柱建物跡★が見つかっています。ここは「ケ」の空間と呼べるでしょう。

以上のような光景は、後期＝一五〇〇年代のことです。

★地面に柱穴を掘って柱を立てた形式の建物。

庭園

門跡か？



■北畠氏館跡庭園実測図（1:1,000）

一般に庭園は、築山の向こうに背景の景色（借景）を見ることが正しい鑑賞法と言われる。

この庭園においても築山があることから東の山々（局ヶ岳）を借景とした図の矢印方向に見るのが正しいと思われる。

門跡の位置からも考えると、矢印付近に庭園を鑑賞できる建物があった可能性があろう。

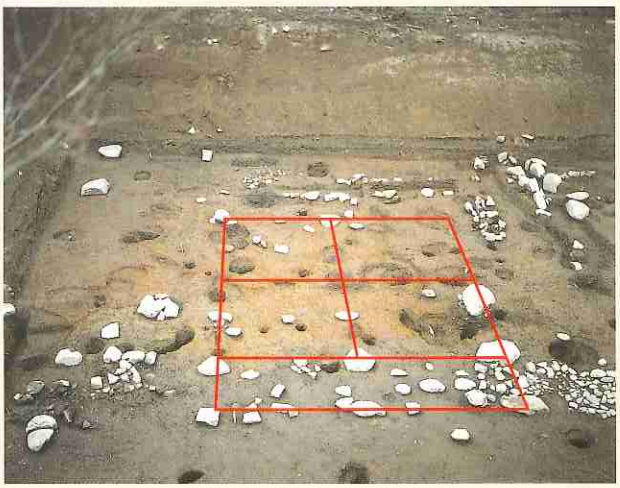
●礎石建物と空間構成

次に前期＝一四〇〇年代を見てみましょう。前期の遺構では、良好な礎石建物跡（そせきたてものあと）があります。礎石建物とは、石の上に柱を建てる構造の建物のことです。北畠氏館跡では、数棟の礎石建物跡を発見していますが、特筆できるのは、二間×二間に東側に縁側を持つものです。この建物の北側では通路と考えられる石敷も発見しています。面積的には小さな建物跡であるにもかかわらず礎石を使う構造という点から、格調の高い建物であった、と考えています。

この礎石建物跡が見つかった地点は上段部分でも最も奥の場所になります。また遺物分析からは、ここに壺・瓶類が多く出土することがわかっています。おそらくこのようなものを飾るような建物があったことでしょう。これらのことと石垣のありかたとを考え合わせると、この近辺が前期においての中心部分であったことがわかります。

館跡の北部では、遺物の出土量が多い点から、遺物を大量消費する場であったことが考えられます。また武器・武具や錠前の出土から倉庫等が建っていた可能性がある地点もあります。

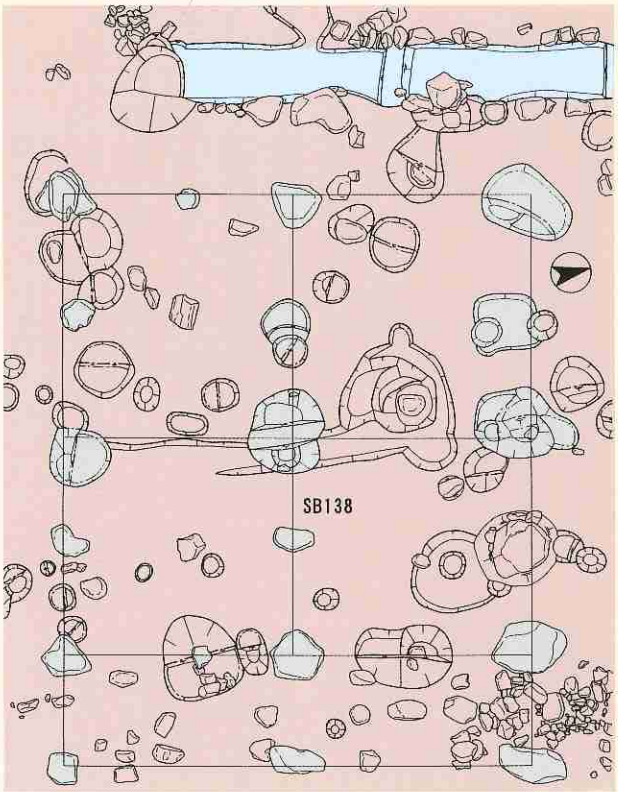
前期においても館跡の北部より中部の方が場の格が高いようです。南部では前期までの発掘調査をほとんど行っていませんが、さらに格が高い空間であったことが予想できます。



■礎石建物跡

石が等間隔で並んでおり、その上に柱が建っていた。やや小さめの石は束石という床を支えていた石である。柱間には京間（1間＝1.97m）が採用されている。

手前には縁側が、右には通路と考えられる石敷が、奥には雨落ち溝もあり、かなり格調の高い建物であったと考えられる。



礎石建物跡　実測図

北畠氏館跡庭園

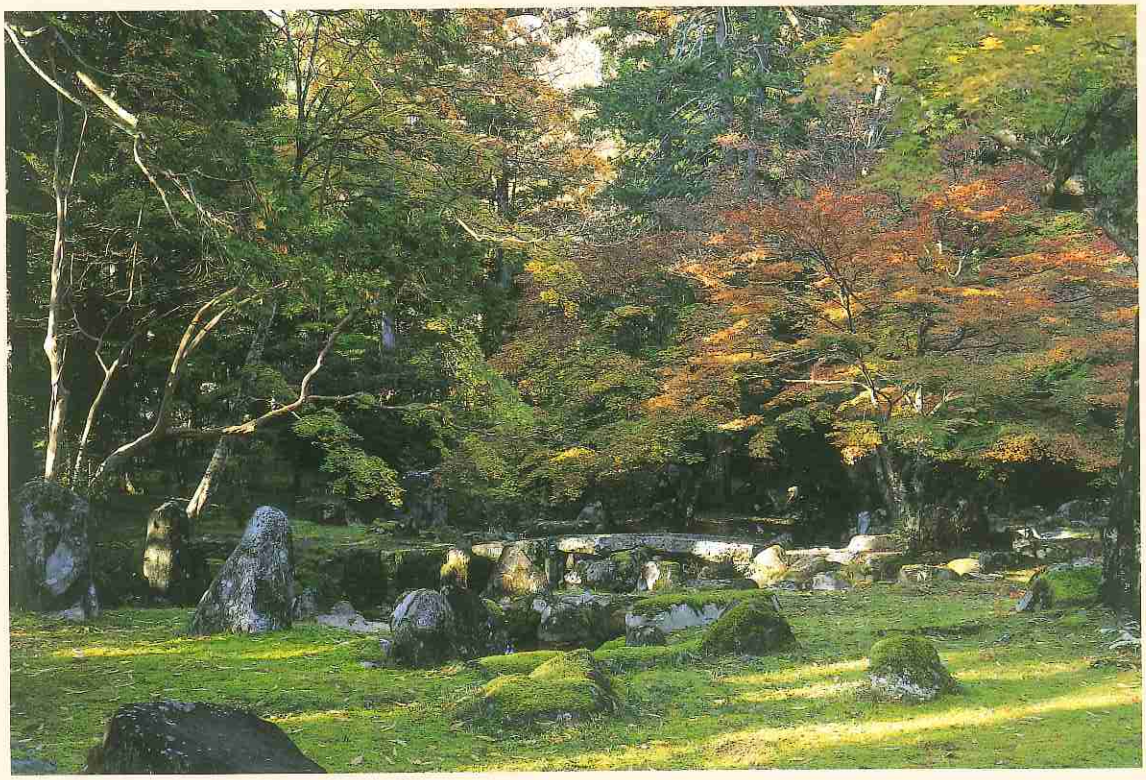
国名勝及び史跡である北畠氏館跡庭園は、戦国時代の庭園として全国的に有名なものです。近年は各地で発掘調査によって戦国時代の庭が見つかってきましたが、この庭園は埋もれずに残っていたものとしてとても貴重なものです。

庭園は、豪快な石組みによる護岸を持つ池と、その東側に築かれた須弥山石[★1]を中心に九山八海[★2]を表したという立石枯山水が特徴です。『作庭記[★3]』には「池もなく遣水もなき所に石をたつる事あり。これを枯山水となづく。」とあり、枯山水は水を用いずに自然風景を表現するものですが、池と枯山水が同居するところもこの庭園の特徴でしょう。また池は「米」の字の形をしていると言われています。それほど入り組んだ複雑な汀線[★4]を持つ見事な池と言えるでしょう。

庭園では一度だけわずかな発掘調査を行い、池が後期大造成の上に作られていることがわかりました。このことから庭園が造られた年代は、後期大造成以降（一五〇〇年代）のことであることがわかりました。庭園が造られたのは享禄元年（一五二八年）頃細川高国によるという説が有力で、発掘調査の成果とも合致しています。

しかし、園池の「米」の字形でも最も西の部分には方形の部分があります。この部分のみ他の部分より早く造られていた可能性もあります。

★1 仏教思想による宇宙の中心にある山。しばしば信仰の対象となる。
★2 仏教思想による世界観を表す言葉。陸と海を表現しているという。
★3 庭造りの指南書。著者は平安後期の歌人橘俊綱とする説が有力。
★4 陸地と水との境界。みぎわ。



国名勝及び史跡　北畠氏館跡庭園

権威の象徴 ―入口と石垣―

発掘調査では、館跡の上段と中段の境に石垣があることが判明しました。その後、石垣の状況を解明するための調査が行われ、北畠氏館跡では、早い段階から大規模な石垣を持っていたことが明らかになりました。

●前期　発掘調査で大規模な石垣を確認しています。確認された石垣の長さは、約二八m、高さは約二・六mで、総延長約九〇mの石垣が想定されています。また、石垣は南北の端で東に折れている可能性があります。

この石垣は、出土遺物から一四〇〇年代の前半に築かれたことがわかっています。城に本格的に石垣が使われるのは一五〇〇年代の後半とされていますので、北畠氏館跡の石垣はその常識を打ち破るものとして注目を集めています。

館跡のほぼ中央では、中段から上段への入口（写真下）が見つかっています。入口は幅四・二mもあります。ここが上段への「大手口」になるのでしょう。

これ以外でも、前期の館跡には小規模な石垣が多く使われています。これらの石垣は、館内部を細かく区切るためのものではないかと思われます。

●後期　一五〇〇年代になると、前期の石垣は大造成により埋めたてられてしまいます。その後の石垣は部分的にしか確認されていません。北畠神社境内と県道の間で見つかった石垣は、後期造成土の法面に築かれており、

上段入口

前期の石垣よりも大ぶりな石が使われ、緩い勾配を持っています。

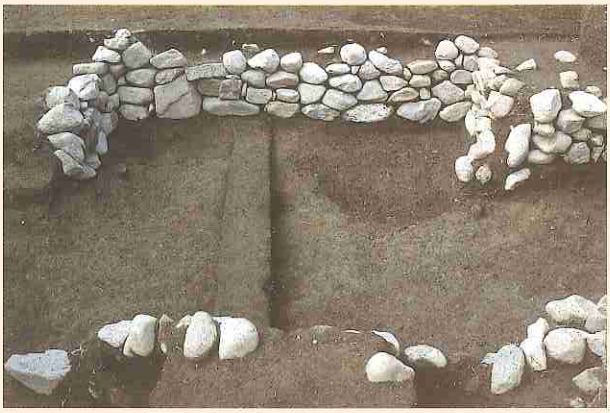
出土遺物や石の積み方から、この石垣は一五〇〇年代前半のものであると思われます。

●石垣の意味　館跡で石垣が築かれているのは、上段と中段の境です。この部分は館の外から見える場所ではなく、敵から攻められやすい場所でもありません。北畠氏がこの場所に石垣を築いたのは、館跡上段を特別な場所として、より立派に、より厳かに見せるためであると考えられています。

●ひろがる「石垣」文化　石垣が使われているのは北畠氏館跡だけではありません。多気の南部にある松月院跡や大正寺跡では、寺院に伴う大規模な石垣が造られています。六田館跡の堀底からは、多くの石が出土しました。館の法面にあった石垣が崩れ落ちたのではないかと考えられています。また、字「六田」の谷には、巨石を用いた石垣があります。

これらの石垣は、使われている石や積み方から一五〇〇年代後半のものであると考えられます。一四〇〇年代には館跡だけにしか使われていなかった石垣も、一五〇〇年代後半になると、多気の各地で造られるようになり、都市部に「石垣」文化がひろがって行きます。

城館としては最古の石垣（SA25・28）



内部区画施設の石垣か？（SA46・47・49）

後期石垣（SA50）

参考　松月院跡の石垣

館の諸施設

北畠氏館跡の中では屋敷を構成する様々な施設が見つかっています。

かわらけ（土師器皿）溜は、当時の皿を大量廃棄した痕跡です。儀礼や宴会などに使用された、と言われるかわらけの大量出土は、北畠氏の権威・権力のあらわれと言えるでしょう。

またそのかわらけの廃棄は、使わなくなった甕に捨てられることもあったようです。このような甕が二基見つかっており、甕の中には大量のかわらけが捨てられていました。甕は常滑産のもので、高さ六〇㎝以上にもおよぶ大甕もあります。甕をよく観察すると、片方には故意に穴を開けた痕跡があります。このことから元々据えてあったものを再利用したのではないか、と考えています。

また館の中では当時のお金がまとまって出土した地点があります。そこでは一ヵ所で六四枚の銅銭が出土しました。これだけ多くの銅銭がまとまって出土することは、備蓄銭または埋納銭（宗教的な意味で埋めたお金）の両方の可能性が考えられます。

このほか館跡の中あちこちで石組溝や石列が見つかっています。

かわらけ溜

埋甕の中に捨てられたかわらけ

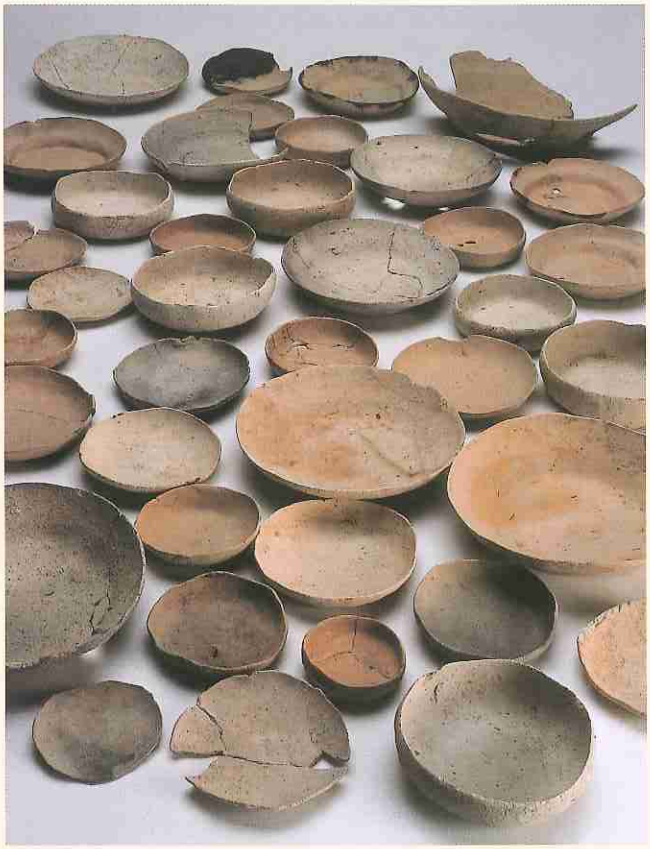
埋甕

銅銭の出土

かわらけ

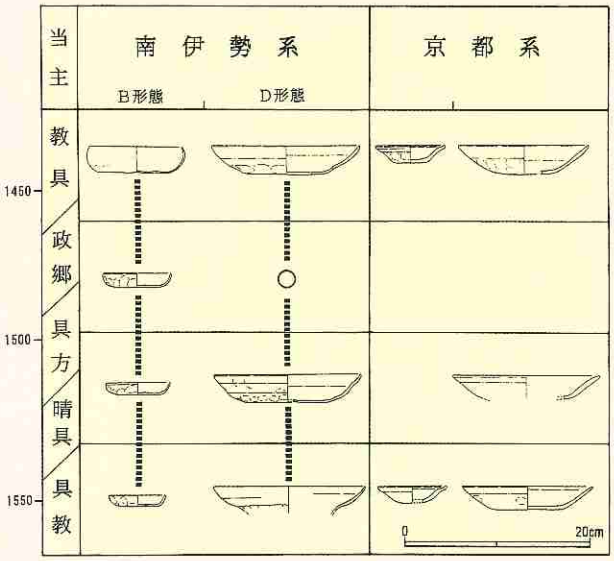
北畠氏館跡で出土する遺物の大半は、かわらけ（土師器皿＝素焼きの皿）です。かわらけは、一説には饗宴に用いられ、その後はすぐ捨てられた、と言われます。かわらけの大量出土は、そこにいた人々の饗宴の跡、つまりそれができるほどの位の高い人がいた証なのです。

北畠氏館跡のかわらけには、地元産である南伊勢系のもののほか、京都系のものもあります。京都系の出土は、当時のミヤコである京都の文化の流入を示すものです。三重県内で京都系が一定量出土するのは、この多気だけです。このほか三重県北部で使用されていた中北勢系のものもあり、かわらけだけでも伊勢国司としての北畠氏の様子を窺い知ることができます。



南伊勢系のかわらけ

京都系のかわらけ



■かわらけ（土師器皿）の変遷

遺跡の年代は、出土した遺物で判断する。特に土器・陶磁器は、最近の研究により細かい年代までわかるようになってきた。上の図では、かわらけの主なものの変遷と当時の北畠氏当主を記した。

特に南伊勢系Ｂ形態ははっきりした変遷を把握でき、年代が新しくなるほど口径・大きさが小さくなっていくのがわかる。

華麗な調度品と備品

北畠氏館跡は多気のなかでも中枢といえる場所ですが、そこには大きく分けてふたつの側面が兼ね備えられていました。ひとつは、北畠氏という組織体の中枢という側面。北畠氏を語る際には、満雅や具教などの当主のみが注目されがちですが、実態は当主を頂点に、その権力を行使するために一族や家臣などの多くの人が集まった団体です。この側面からは、館は「公的施設」としての意味を持っています。

もうひとつは、北畠家という「イエ」の長が住まうところという側面。北畠氏当主は、木造家や坂内家などの一族を束ねる「惣領」です。この意味からは、館とは私的な空間として見ることができます。

そして忘れてはならないのが、館は北畠教具や具方といった当主だけの住まいではないことです。そこには当然、家司や側近といった家臣や使用人、そして家族の姿が見られたはずです。そして、彼らと関わる公的・私的な客人

■出土した銭貨

館跡からは、100枚以上の銭貨が出土している。なかでも多いのが永楽通寶という中国は明王朝の銭。永楽銭は伊勢湾から関東にかけての地域と、九州の一部で重宝される銭種である。北畠氏は、東国とも緊密な関わりを有していたのだろうか。

■出土した銅製品

この中には金箔が施されたものもある。

■金銅装引手金具

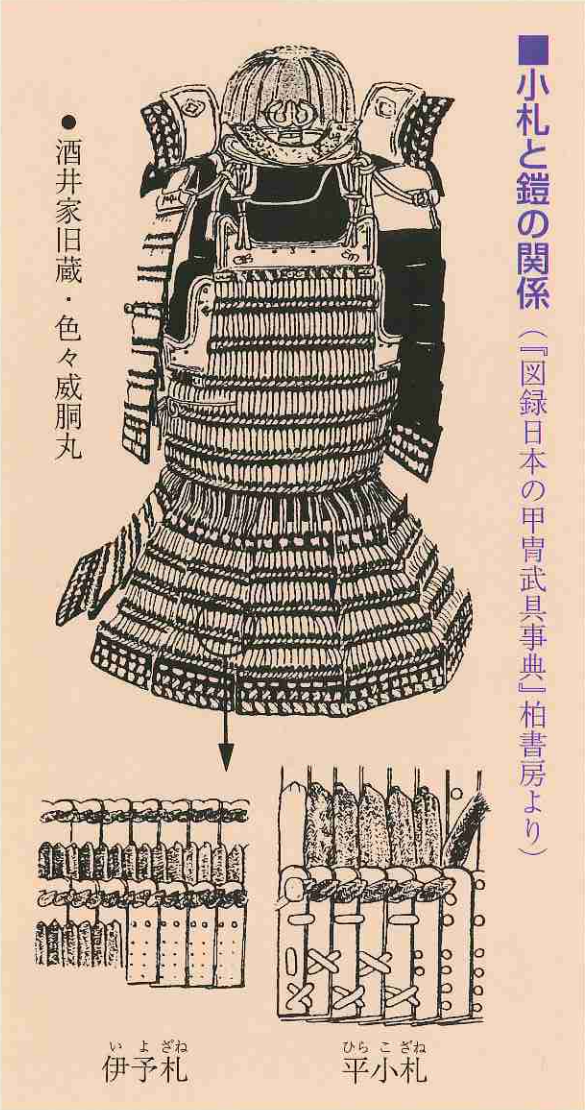
館跡庭園のすぐ北側で出土した。襖か引き戸の把手と考えられる。華麗な作りであり、かなり重要な部屋に使われていたものであろう。

■鎧の一部

公家というイメージの強い北畠氏であるが、館跡から出土した鎧（よろい）の一部は、彼らが武家であることを雄弁に物語る。上の写真の上・中段は鎧の一部で「小札（こざね）」という。小札の中央には２列の小孔が並んでおり、これに糸を通して組み合わせ、さらに漆を厚く塗って組み合わせ一両の鎧を造る。博物館などでよく見かける右側の図のような鎧も、この小札をとじ合わせたものである。北畠氏館跡では、屋敷地の北部で集中的に見つかっている。

■錠前

錆び付いているが、かなりしっかりした錠前である。屋敷地のなかに、蔵があったのだろうか。

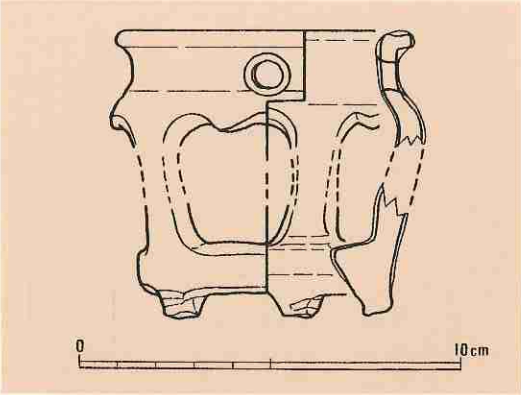


のほか、多くの人々がここを頻繁に出入りしていたことでしょう。そして、様々な出来事が館のなかで繰り広げられていたと考えられます。

館跡を発掘すると様々なものが出土しますが、それぞれに違った意味があります。出土品の観察を通じ、かつて館に住んだ人々と「モノ」を通じて行う「対話」は、まさに歴史研究の醍醐味なのです。

憧れと威信 ―貿易陶磁―

青磁　水鳥形香合



青磁器台　実測図（1：2）

鳳凰か朱雀の文様がある青磁片

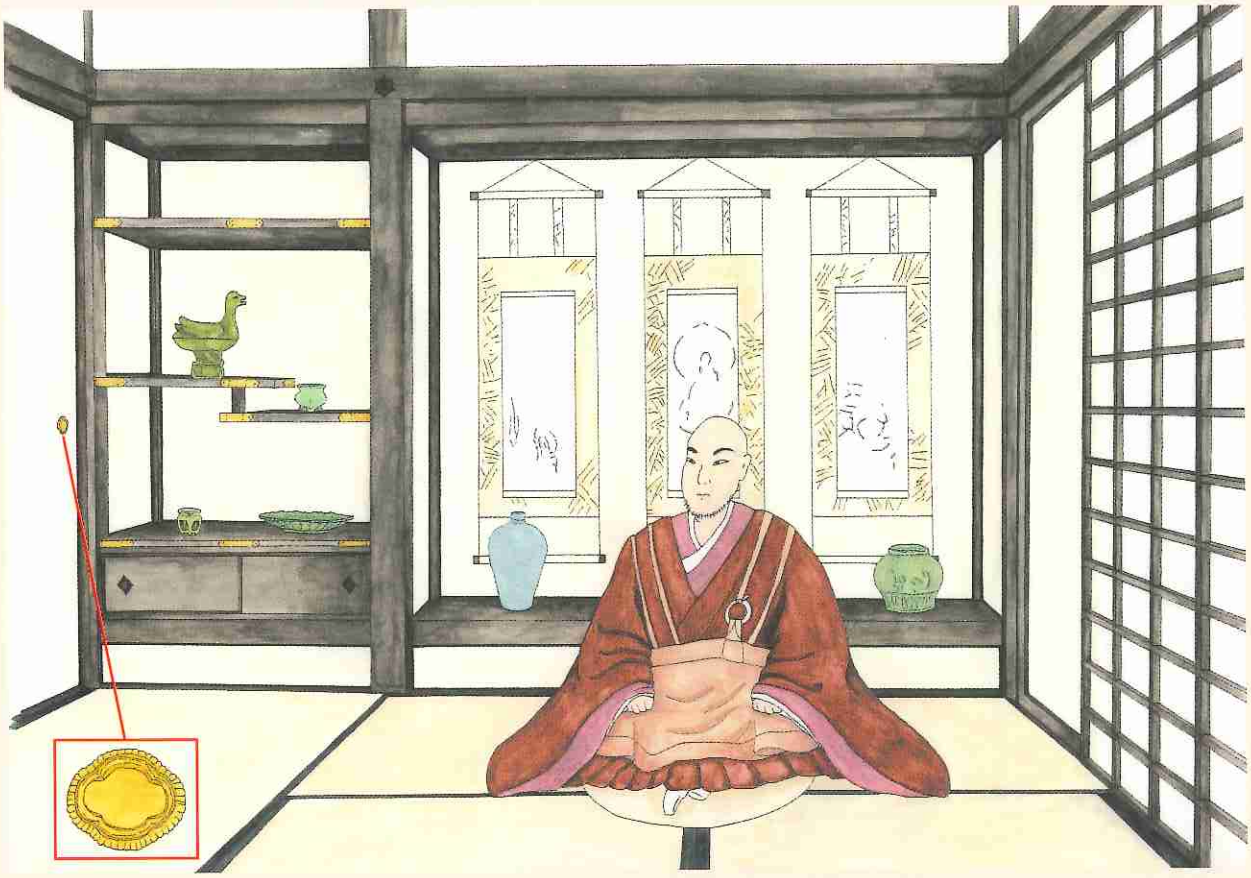
北畠氏館跡では、多くの中国から輸入された青磁、白磁などの貿易陶磁が出土しています。当時は、日本国内で磁器の生産が行われておらず、大量の、そして良質の貿易陶磁を持っていることは、かなりの経済力を持っていた、ということを示しています。

中でも古くから館跡出土と伝来される青磁水鳥形香合は大変貴重なもので、北畠氏の大きな権力の象徴と言えます。

発掘調査で出土したものにも、碗のほか盤★類や酒海壺（しゅかいこ）、梅瓶（めいびん）、香炉、器台、天目茶碗等があり、伊勢国司としての風格を漂わせるものがあります。また壺と思われる鳳凰か朱雀の文様がある青磁片も貴重なものです。

出土した貿易陶磁類

★盤は大皿、酒海壺は酒を入れておく壺、梅瓶は花瓶、香炉は香を炊くための器、器台は特殊な容器や蓋を置くための台、天目茶碗は茶を嗜むための器である。これらは高級品であったため、座敷飾りとして用いられていたと考えられている。



北畠氏館跡のある一室を想像復原したもの。
※建物は慈照寺東求堂同仁斎を、人物は無外逸方（北畠政勝）寿像（松阪市浄眼寺蔵）を参考とした。

貿易陶磁のうち、特に水鳥形香合、器台、酒海壺、盤（大皿）、梅瓶は、威信財と言われるものです。威信財とは、その使用者の富や権威を表すもののことです。

当時の大名たちの間では、このような威信材を持つことが流行していたようです。威信材の多くは鎌倉時代のもので、北畠氏の時代には既に骨董品になっていたものです。これらを持つことにより、北畠氏は自分達の富や権威を表現していたのでしょう。

これらの威信材は、主に会所（接客の間）などに置いてあったものと考えられます。権力者は、接客の際に威信材によって自らをアピールしたのでしょう。大いに自慢する様子が想像できます。

上の図では、北畠氏館跡のある一室を想像復原してみました。棚に飾ったものは、実際に北畠氏館跡から出土したものばかりです。

北畠氏を滅亡させたのは、織田氏です。その当主信長は、唐物★狩りをしたと言われるほど名物が好きだったようで、織田氏によって北畠氏の貿易陶磁の大部分を持っていかれた可能性もあります。国司茄子と呼ばれる茶入（大阪藤田美術館蔵）もそのうちの一つなのかもしれません。

しかし残っていて発掘されたものだけでも、これだけの品揃えがあります。また想像図には載せきれなかったものもたくさんあります。北畠氏の時代に、多気にはいったいどれだけ多くの品々があったのでしょうか。

★中国のもの。

各地から運ばれてきたもの ―様々な陶磁器―

北畠氏館跡では、国産陶器も多く出土しています。最も多いのは、瀬戸美濃（愛知県・岐阜県）産のもので、次いで常滑（愛知県）産のものもあります。また少量ですが、信楽（滋賀県）産もあります。数点ですが、三重県ではほとんど出土しない備前（岡山県）産もあります。このように各地の陶器を取り入れることができたのも、北畠氏が東西両方へのつながりがあったことによるものでしょう。

このほか大和系である瓦質土器からは、大和宇陀郡にも勢力を伸ばしたり、興福寺子院に子らを入室させていた北畠氏の実態が窺えます。

瀬戸美濃産・常滑産陶器

信楽産・備前産陶器、大和系瓦質土器

■各地との交流

北畠氏館跡では、各地で生産された陶磁器が出土している。

元来瀬戸美濃・常滑は流通圏であり、北畠氏が一定の権力を有していた安濃津の港を介した海路での交流が窺える。また信楽・大和系瓦質土器には陸路での運搬が考えられる。このような様々な産地のものが入ってくるのは、北畠氏の力と共に、多気の立地という点も関係があるのだろう。

祈りの風景 ―まつり―

北畠氏館跡では、当時の信仰に関する遺構・遺物も発掘されています。

犬形土製品は小さな犬の焼き物です。近畿地方の室町～江戸時代の館や町場の遺跡で出土することが指摘されているもので、大坂城跡の出土例が有名です。三重県でも幾例かの報告があり、多気では比較的多く出土しています。用途ははっきりとわかっていませんが、安産多産など犬に対する信仰のものかもしれません。

また皿の裏に墨で書いた鬼神か人面は、何かを祈願したものと言えるでしょう。同じく皿の裏に墨で描かれたカエデは、秋の風景を物語ります。当時の多気も今と同じように美しい紅葉だったのでしょうか。カエデ墨書は江戸時代に地鎮に使用されていた例もあります。館跡のものも地鎮に関する遺物の可能性があります。

地鎮と言えば、館跡では地鎮らしき遺構も見つかっています。かわらけが複数枚重なって出土しています。当時も土地に対する安全祈願があったようです。むしろ当時の方が信仰は深かったでしょう。

かわらけの周囲に黒いススが付いているものは、油のこげた跡で、このことから灯りをとるための灯明皿だったとわかります。灯明皿は一般生活に関するものでしょうが、中には燭台を使いながら仏の灯りとしたものもあるかもしれません。

犬形土製品

特異な墨書土器

地鎮跡か？

燭台と灯明皿

北畠氏館跡と中世都市・多気

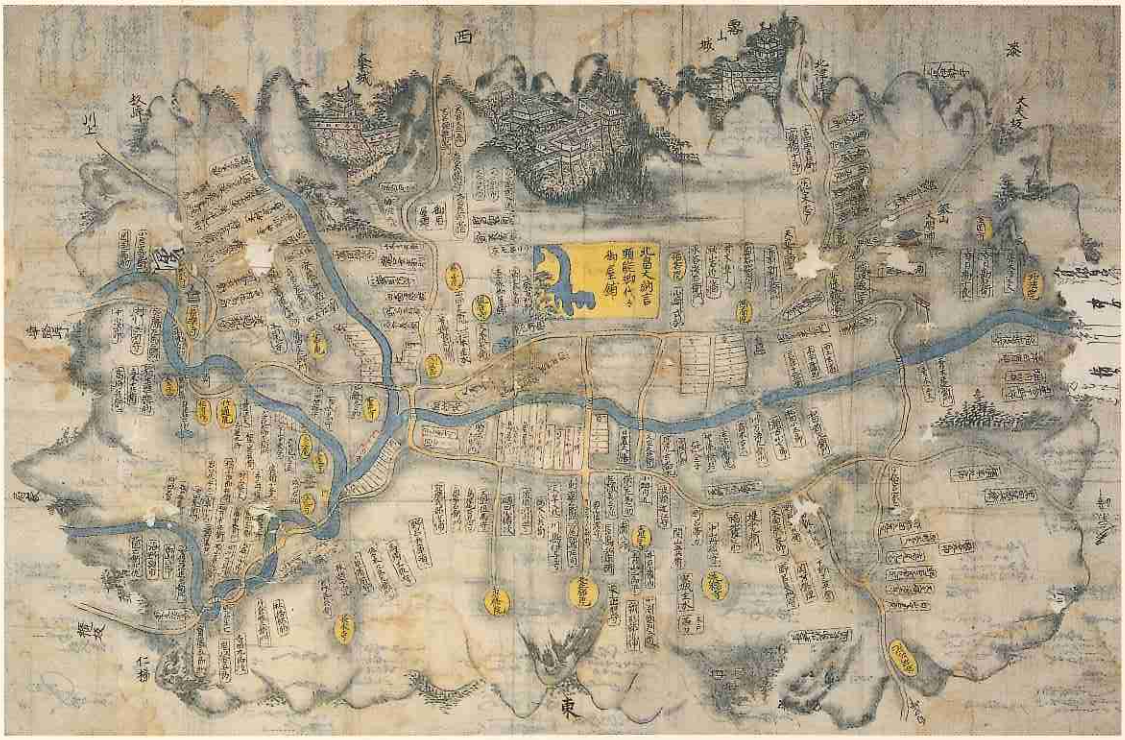
調査を続けてきた北畠氏館跡では、様々なことがわかってきました。

北畠氏館跡は遅くとも一四〇〇年代前半にはできています。全国の大名居館と比較して古い時期からある館跡です。これは、他の大名と違いずっと在国し続けた伊勢国司北畠氏の特徴が表れています。つまり他に例のない貴重なものなのです。

その特徴としては、全国的にも古い時期から石垣を採用するなどの独自性が見られることが挙げられます。また、遺物面では威信材や京都系土師器皿を受け入れるなど京都とのつながりを重視するという各地の大名との共通点もあります。このような点は、朝廷・公家社会と、また実質的大名として幕府・武家社会とのつながりという北畠氏の二面性を表していると考えられます。

そして多気の遺跡の魅力は、北畠氏館跡のみならず、規模・時期・構造等々の面において全国的に貴重とされる都市域です。六田館跡（伝東御所）や多くの寺院跡、町部分は、わずかな調査しか行われていなく、今後都市域の調査も本格化させる必要があります。

下のような城下絵図がたくさん残る多気。現地には館跡・寺院跡が残る多気。この貴重で重要な遺跡を残し、活かすことで美杉地域全体を活性化させることも不可能ではないことでしょう。



多気城下絵図（江戸時代）（個人蔵）

北畠氏・多気　略年表

西暦	元号	当主	出来事	遺構
一三三六年	建武三 延元元		北畠親房、伊勢に入る。田丸城（現度会郡玉城町）を拠点とする。	
一三四二年	興国三 康永元	顕能	八月田丸城落城。北畠氏多気に移る？（興国四年説あり）（『波多野氏所蔵文書』）	
一三九二年	明徳三		南北朝の合一。このころから、北畠氏は室町幕府と接近か。	
一四〇三年	応永一〇	顕泰	北畠関連としての「多気」史料上の初見。（『醍醐枝葉抄』）	
一四一四年	応永二二	満雅	北畠満雅、幕府に対し挙兵。杉峠・飼坂峠辺りを挟みにらみ合い。満雅と幕府は和議。（『満済准后日記』）	霧山城跡
一四二八年	正長元		後亀山天皇の孫小倉宮、伊勢国に出奔。「国司在所多気」の奥「興津」に入る。（『満済准后日記』）	
一四三〇年	永享二	顕雅 教具	北畠満雅、再び挙兵。（『満済准后日記』）一二月満雅、戦死する。（『師郷記』など）満雅の弟顕雅、満済・赤松満祐の仲介により、将軍足利義教と対面。（『満済准后日記』）	この頃、北畠氏館跡石垣SA二五・二八造営か。
一四四一年	嘉吉元		赤松満祐、将軍足利義教を殺害（嘉吉の乱）。赤松氏滅亡後、満祐の子教康、伊勢国司を頼るが、北畠氏はこれを匿わず誅殺する。（『建内記』）	
一四六七年	応仁元		応仁・文明の乱。将軍足利義政の弟義視、応仁の乱時に伊勢下向、小倭の常光寺で国司教具と対面。（『応仁記』）	礎石建物SB一三八はこの頃。
一四七一年	文明三	政郷 ＝政勝 （逸方）	北畠政勝、父教具の死去により家督を継ぐ。（『内宮引付』『大乗院寺社雑事記』など）	
一四七九年	文明一二		北伊勢で長野氏と合戦するが、大敗。（『大乗院寺社雑事記』『氏経神事記』）	
一四九七年	明応六	具方 ＝材親	木造政宗が北畠師茂（具方の異母弟）と結び反乱。（『大乗院寺社雑事記』『大乗院日記目録』）	埋甕はこの頃か。
一四九九年	明応八		北畠氏の多気館ことごとく焼失する。（『大乗院寺社雑事記』）	
一五〇〇年	明応九		多気在所建立＝再建か。（『大乗院寺社雑事記』）	北畠氏館跡後期整地（大造成）はこの時か。
一五二九年	享禄二	晴具	細川高国、伊勢に下向。北畠氏館跡庭園を造作か？	
一五三九年	天文六	具教	この頃領域を拡大するが、永禄に入り、領域内志摩・宇陀での軍事的緊張高まる。（『澤氏古文書』など）	石垣SA五〇この頃か。霧山城改修か。
一五六二年	永禄五	具房	この頃、具房家督を継ぐ。（『浄眼寺文書』）	礎石建物SB一八〇この頃。
一五六九年	永禄一二		織田信長、南伊勢に侵攻、天花寺城・阿坂城・大河内城で北畠具教と戦う。信長の次男茶筅丸（信雄＝北畠具豊）を北畠氏の養子とし、和睦。（『信長公記』『多聞院日記』）	
一五七六年	天正四	具豊	具教、信長により殺害され、北畠氏滅亡。この後多気も衰退か。（『公卿補任』『勢州軍記』など）	

〈主な引用・参考文献〉

- 小林俊之編『北畠氏館跡９－多気北畠氏遺跡第26次調査・北畠氏館跡総括編－』美杉村教委、2005年。
- 藤田達生編『伊勢国司北畠氏の研究』吉川弘文館、2004年。
- 『日本名建築写真選集第11巻　金閣寺・銀閣寺』新潮社、1992年。
- 大橋治三・齋藤忠一編『日本庭園鑑賞事典』東京堂出版、1998年。
- 『図録日本の甲冑武具事典』柏書房、1981年。

北畠氏館跡

２００６．１発行

編集発行　　津市教育委員会

印　　刷　　東海印刷株式会社